



mini

編集兼発行人

県立糸魚川高校生徒会

出版委員会

第1号



しつぽが割れたふるい
猫又もかわいらしく見える。

江戸から続く猫ブーム

猫好きもアート好きも必見

4月15日(土)から新潟県立歴史博物館で、春季企画展「猫と人の200年(にゃくねん)ーアートになった猫たちー」が開催されています。この展覧会には約200点の作品が展示されています。

そこで見た私たちのおすすめのアートを紹介します。

中右瑛による「唐猫(からねこ)と呼ばれ、平安時代は高価なものです。貴族が紐につけて室内で飼つていたそうです。その様子が下の清賀『蹴鞠』(源氏物語の若菜の段)に描かれています。柏木

歌川国芳の浮世絵について説明する中右瑛(なかう えい)さん。今回の企画の展示監修者であり国際浮世絵学会常任理事。

が猫のいたずらで女三宮を垣間見てしまう、有名な場面です。



江戸時代になってネズミが増え、庶民が猫を放し飼いで飼うようになりました。猫をこぼりました。

明治になり、夏目漱石が「吾輩は猫である」を書き、大正時代では、竹久夢二が「黒猫」を描き、多くの芸術家が

猫を愛してきました。そして、現代の私たちも、もちろん猫を愛しています。

ブームの火付け役とな

りました。



おすすめアート

お気に入りの1点はどれ?



もしかして
アイドルグッズ?

この团扇絵は、1841年頃に歌川国芳によつて描かれた「猫の百めんそう」です。当時、歌舞伎役者の絵を描くことが禁じられて

いたので、顔を猫に置き換えて描いたものであります。

今で言えば、好きなアイドルグランプのメンバーの団扇を持つような感覚で、江戸時代の人たちも人気の役者を応援していたのだろうかと想像してしまいました。

浮世絵
パロディー

東洲斎写楽の名作

「三代目大谷鬼次の奴江戸兵衛」のパロディ

の「写楽の江戸兵衛と

同じボーズをとる猫」

です。この作品に目が止まつたのは、写楽の

作品が私たちが使つて

いる古語辞典のケース

絵となつてゐるからで

した。気になった方は

自分で見てはどうでし

ょうか。

君の屋は?
「化け猫」

これは、1861年に三代歌川豊国によつて描かれた古猫の怪」という作品です。パックには目が金色に光つた大きな化け猫がいます。前には手拭いを被つて踊る猫たちがいます。化け猫の尻尾は二つに分かれています。

新潟県にも化け猫の

伝説が残つていて、そ

の一つが南魚沼市の雲

洞庵の北高和尚の化け

猫退治の話。火の玉に

乗つて死体を奪おうと

した化け猫を和尚が退

治したという話です。

今回の企画展の一番最

後にその時の証拠が展

示されています。

どうぞお楽しみに。

絶品 にゃんこ丼



館内の「レストラン縄文」では、各企画展ごとに特別メニューが出される。今回は、「かつお節香る豪華猫マンマ、サンマの蒲焼丼」だ。人も猫も(きっと)大満足のおいしさだ。ぜひ食べてみてほしい。